技の伝承

開催趣旨

令和2年に国立工芸館が石川県金沢市へ移転後、首都圏で工芸作品の魅力を伝える場が少なくなりました。そこで、東京国立近代美術館及び国立工芸館は、日本工芸会との連携・監修のもと、旧工芸館建物において、重要無形文化財保持者（漆芸部門）の作家4名による技の解説及び実演、文化庁記録映画の上映を行います。伝統工芸の魅力発信、技と作品の後世への継承の機会となることを願っております。

作家関連展示内容

4名の漆芸作家の作品の制作工程を示す実物資料
4名の漆芸作家が使用する、各種の木地、刀、漆濾、筆、刷毛、研炭などの道具類

漆芸関連技術展示

漆採取後原木、うるし掻き道具、漆精製舟、漆刷毛制作資料、各種研炭

吹上地区(長野県伊那市西箕輪)漆林

＊2｜沈金 ちんきん

塗面に彫刻刀（沈金刀、沈金鑿）で文様を彫り、堀溝に漆を擦り込んで金箔や金粉などを埋める技法です。彫刻技法には線彫、点彫、片切彫、コスリ彫などの種類があり、刻文には箔置き、粉入れなどを施すほか、素彫りのままで仕上げるものもあります。中国では鎗金（戧金、創金）と呼ばれ宋代から行われていた技法で、室町時代には我が国でも始められたと考えられ、近世以降、特に石川県輪島では高度な発達をみました。各種の彫刻技法を組み合わせた芸術性豊かな表現が行われるようになっています。

＊3｜髹漆 きゅうしつ

漆塗を主とする漆芸技法であり、素地の造形から下地の工程を経て上塗・仕上げ工程に至る幅広い領域にわたり、漆芸の根幹をなす重要な技法です。素地には木材、竹、布、和紙などが用いられ、各材質の特色を活かした下地、上塗が施されます。上塗・仕上げには、塗面を磨かず塗放で仕上げる塗立（花塗）、磨いて光沢を出す呂色塗など多くの種類があります。もっとも早く始められた漆芸技法であり、現在では、立体的な造形と漆特有の光沢や塗肌の味わいを生かした制作が行われています。

＊4｜蒟醤 きんま

蒟醤は、漆芸の加飾（装飾）技法の一つで、漆の塗面に剣という特殊な彫刻刀で文様を彫り、その凹みに色漆を埋めて研ぎ出し、磨き仕上げるもので、線刻の美しさが発揮されます。中国の古代漆器の線刻技法が東南アジアに伝播したものとみなされ、我が国には、江戸末期に活躍した玉楮象谷以来、高松でさかんになりました。近現代には点彫などの手法が生まれ、立体的な表現や複雑な表現が行われるようになっています。

＊5｜蒔絵 まきえ

蒔絵は、漆芸の加飾（装飾）技法の一つで、漆で描いた下絵に金粉や銀粉、色粉などを蒔き付けて文様を表すものです。奈良時代に技法の源流がみられ、平安時代以降高度に発達しました。金粉を蒔いて漆で塗り込み、研ぎ出して文様を表す研出蒔絵のほか、金粉を蒔き放すかまたは磨いて仕上げる平蒔絵、漆下地などで立体的に盛り上げた文様の上に金粉を蒔く高蒔絵などがあります。金属板を用いる平文、貝を用いる螺鈿などの技法が併用されることが多く、多彩な表現が行われています。

参加 無料

◉事前申込方法

- 専用HPの「お申込フォーム」から必要項目をご記入して、必ず事前にお申込ください。
  なお、登録後に自動返信メールにある申込番号は、参加番号とは異なります。ご注意ください。
- 申込多数の場合、抽選により、当選者に、参加証番号をメールでお送りします。
- 当日、参加証番号を必ずご持参いただき、受付に提示してください。
  番号を確認後参加証をお渡しします。入場には参加証が必要です。
- お申込は右、QRコードからでもできます。
  お申込URL：https://www.kuba.co.jp/waza2023/index.html

お申込はこちら

令和4年度 文化庁首都圏伝統工芸技術作品展等開催事業

技の伝承

漆芸の人間国宝＊1による技の実演・講演

＊1｜重要無形文化財(各個認定)保持者

◉主催…**東京国立近代美術館、国立工芸館**

◉協力…石川県立輪島漆芸技術研修所、石川県輪島漆芸美術館、香川県漆芸研究所、日本うるし掻き技術保存会、公益社団法人日本工芸会、日本文化財漆協会、公益財団法人ボーラ伝統文化振興財団、九世 泉清吉（漆刷毛製作）、木戸口武夫（研炭製造）

◉会場…**旧東京国立近代美術館工芸館**（重要文化財旧近衛師団司令部庁舎） 東京都千代田区北の丸公園1-1

◉出演作家…

令和5年3月25日土 午前 **山岸一男・沈金＊2** 午後 **増村紀一郎・髹漆＊3**

26日日 午前 **山下義人・蒟醤＊4** 午後 **室瀬和美・蒔絵＊5**

＊2～＊5 用語説明は最終ページ参照

3月25日、26日 午前の部

09:45～	開場
10:00～	開会挨拶
10:05～	作家紹介DVD上映
10:25～	実演
11:15～12:00	講演
12:15	閉会

3月25日、26日 午後の部

13:45～	開場
14:00～	開会挨拶
14:05～	作家紹介DVD上映
14:25～	実演
15:10～16:00	講演
16:15	閉会

山岸一男
やまぎしかずお
昭和29（1954）年4月12日生
平成30（2018）年9月25日
重要無形文化財「沈金」の
保持者に認定

増村紀一郎
ますむらきいちろう
昭和16（1941）年12月1日生
平成20（2008）年9月11日
重要無形文化財「髹漆」の
保持者に認定

山下義人
やましたよしと
昭和26（1951）年9月21日生
平成25（2013）年9月26日
重要無形文化財「蒟醤」の
保持者に認定

室瀬和美
むろせかずみ
昭和25（1950）年12月26日生
平成20（2008）年9月11日
重要無形文化財「蒔絵」の
保持者に認定

25日 午前の部

山岸一男 やまぎしかずお

沈金（ちんきん） *Chinkin*

沈黒象嵌箱「映」
2012年 個人蔵

石川県生まれ、沈金師・福光文次郎（ふくみつぶんじろう）に師事するとともに、石川県立輪島漆芸技術研修所沈金科で学び、伝統的な沈金技法を習得しました。

同氏は、基本的な沈金技法に加え、沈金の一種で彫溝を黒く仕上げる沈黒や、輪島で沈金を応用して発展した「沈黒象嵌」と呼ばれる技法を積極的に用いる作風を確立し、沈金の表現の可能性を広げました。その技法には独自の工夫が重ねられており、彫溝に漆を摺り込む沈黒は繊細な質感表現を、彫溝に色漆などを埋めて研ぐ「沈金象嵌」は複雑な色彩表現を可能としています。これらの技法を効果的に織り交ぜ、北国の自然や風景を大胆に抽象化して表す作品は、現代感覚溢れるものとして高く評価されています。

25日 午後の部

増村紀一郎 ますむらきいちろう

髹漆（きゅうしつ） *Kyusitsu*

東京に生まれ、東京藝術大学で漆芸の各種技法及び表現について学ぶとともに、父・増村益城（ましき）の指導を受け、乾漆、縄胎などの髹漆技法を身につけました。さらに、正倉院宝物「御袈裟箱第1号」の復元模造を手掛けて漆皮（しっぴ）技法についても研究を深め、髹漆の技法を幅広く高度に体得しました。

素地造形には、麻布や和紙を漆で貼り重ねる乾漆技法を中心に、皮を木枠に張り込み漆で固める漆皮、麻紐を漆で固める縄胎などの技法を用います。乾漆素地の上塗・仕上げは朱漆、黒漆、ぼかし塗などの呂色仕上げを主とし、漆皮、縄胎などは溜塗などの塗立仕上げとし、素地造形技法と上塗・仕上げ技法を組み合わせ幅広い表現を行います。その作品は、豊かな量感を備えた簡素な造形に特色を示し、素材や漆の特質を活かした力強い造形美が高く評価されています。

乾漆花鉢
2019年 個人蔵

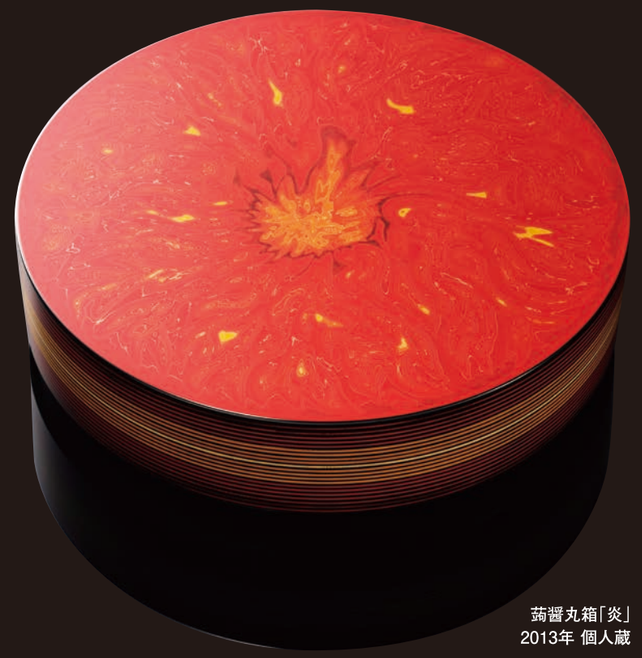
26日 午前の部

山下義人 やましたよしと

蒟醤（きんま） *Kinma*

香川県に生まれ、香川県立高松工芸高等学校及び香川県漆芸研究所で蒟醤をはじめとする漆芸技法を幅広く習得したのち、磯井正美や田口善国（たぐちよしくに）に師事しました。その後も活発な創作活動を展開しながら研鑽を積み、蒟醤の技法や表現について研究を深めました。

同氏の蒟醤技法の特徴は、幅広い彫りと色埋めを丹念に繰り返すことにあり、これによって濃色から淡色に至る数十色の色漆を塗り重ねるなど、色漆のグラデーションを活かした緻密な表現を行います。また蒔絵を併用するなどの工夫を加えることもあります。そして、それらの技法を駆使して、自然界に着想を得た個性的な意匠の作品を制作しています。その作風は、自然の微妙な生物を詩情豊かに表現するものであり、芸術的に優れているとして高い評価を得ています。



蒟醤丸箱「炎」
2013年 個人蔵

26日 午後の部

室瀬和美 むろせかずみ

蒔絵（まきえ） *Makie*

蒔絵螺鈿硯箱「椿」
2005年 個人蔵

東京に生まれ、東京藝術大学大学院で田口善国に師事するとともに父・室瀬春二や松田権六などの指導を受け、蒔絵を中心とする伝統的な漆芸技法を幅広く習得しました。さらに、国宝などの漆工品の保存修復や復元模造にも携わりながら創作活動を展開し、技法及びその表現について研究を深め、蒔絵の技法を高度に体得しました。

古典研究を通じて得た技法及び材料に関する豊富な知見に基づき、研出蒔絵、高蒔絵をはじめとする広範で精緻な蒔絵技法を駆使します。伝統技法を踏まえながら独自の工夫を加え、各種の金粉や乾漆粉を組み合わせて用いるほか、螺鈿（らでん）技法などを併用し、多彩な色彩表現を取り入れた制作を行います。その作品は、現代的感性が表現された端正な意匠と構成を特色とし、気品と風格を備えたものとして高く評価されています。